

## 解説

田浪 亜史江

アダニヤ・シブリー (Adania Shibli) は、一九七四年、パレスチナ生まれの女性作家である。英仏のメディアによる「九・一一攻撃と対テロ戦争」に関する視覚操作を主題とした研究によって、イースト・ロンドン大学から博士号を得ている。現在はベルリンとエルサレムを往復する生活を送っているという。これまでに三編の小説を発表しており、二〇〇九年、三九歳以下の有望なアラブ作家三十九人を選出した企画「ペイルート<sup>39</sup>」の一人に選出された。その知的な顔立ちとスタイリッシュな雰囲気はインターネットで簡単に確認できるが、本人に連絡を取ると、「自分の顔を出すのは好きではない」とのこと、写真掲載は見送ることになった。実を言えば、最新作『とるに足らない細部 (Tafassi Thawwi)』(二〇一七年)の抄訳をここに掲載しなかったのだが、版權との関係で叶わなかった。この作品は、一九四八年のイスラエル建国によるパレスチナ人のナクバ(大災害)に対する、現代の若い世代によるアプロー

チのあり方の一つを示した中編作品である。前半部分では、エジプトとの休戦協定締結後の一九四九年八月、同国との境界付近でパトロールを行うイスラエルの部隊の司令官に焦点が当てられている。周辺に残るアラブ人は無条件に掃討するという指令のもと、この部隊はたまたま遭遇したベドウィンの集団を銃撃によって放逐する。ただ一人生け捕りにされた少女は、兵士たちにレイプされたのち殺害され、砂漠に埋められる。後半部は現代が舞台で、パレスチナ自治区の中心都市ラマツラーに在住するパレスチナ女性の一人称で語られる。イスラエル人ジャーナリストが書いたこの事件に関する記事を読むと、ある理由から彼女は、それをどうしても忘れられなくなり、自分の目で現地を見たいという思いにとりつかれる。しかし一九九〇年代後半以降、とりわけ「分離壁」の建設後、イスラエル領内へのアクセスは、占領地のパレスチナ人にとって極端に難しくなっている。

一般に、占領地に住む人間がイスラエル領内に入れるのは労働許可を得た場合だが、それ以外には病氣治療などリスト化された「正当な理由」とその証明が必要であり、申請料を添えて書類を提出し、数か月待たなければならぬ。作品中ではとくに説明されないが、仮にこうした手続きを踏もうとしても、語り手がイスラエ

ル領内に入ることは認められまい。いずれにせよ彼女は友人からIDカードを借り、イスラエルで登録された車をレンタルしてカランダディア検問所に向かう。IDカードの不正使用が露見すれば捕まってしまうという危険を冒しつつ運よく検問を通り抜けると、彼女はそのまま現地まで車で向かう。だが、そこで具体的に得られる情報は当然にも、砂漠を縁に変えるまでの不屈の努力と勝利、といったイスラエル側のナラティブだけである。

支配的な歴史記述に現れない過去の出来事にいかにアプローチするかといったテーマは、あらゆる社会で問題とされる一方で、パレスチナにおけるその困難の特殊性と重層性は、これまでも繰り返し指摘されて来た。本作では、ある偶然をきっかけとして過去の事件にどどんと深入りしてゆく「私」のあり方を通し、そのことが身体感覚のように伝わってくる。また、読みながら情景が目には浮かぶ文体は映像を研究した筆者ならではのもので、現代のパレスチナの土地に対するパレスチナ人の地理感覚について関心をもつ筆者の強い関心を引いた。

ここに訳出した「この海はムハンマド・アルIIハティープのもの」は短編であり、文体は全く異なるものの、パレスチナのなかのある場所へへのアクセスのとてつもない困難、というテーマは上記『とるに足らない細部』と通じる。

付記にある通り、本作はじっさいに起きた出来事をもとになっており、彼の溺死を報じる小さなニュースはいまも、インターネットサイトで確認できる。ムハンマド青年は二〇一六年九月一日の夕方にヤーファの海で行方不明となり、翌日の金曜日の朝に遺体が発見された。遺体は検死などを行うイスラエル保健省管轄機関に運ばれたという。

この情報に接した誰もが多かれ少なかれ、この青年がどのような手段を使ってヤーファまで行ったのかについて想像をめぐらせることだろう。正式な許可が出ていたのかどうか、出ていたのならそれはどうやって？ 作者は、ムハンマドはともかく「海に行きたくなった」のだということにする。申請書に書けるような理由などない。これは『とるに足らない細部』と似た設定であるが、こちらの語り手が少なくとも自分自身を納得させる理由を見出すのに対し、ムハンマドの場合は理屈抜きに「海に行きたい」のだ。こんな素朴な欲求と、それを実現するために強いられる、迂遠で途方もない苦勞との落差。だがこうした欲求を叶えるために行動することは、ほんらい絶対的な自由に属することであるはずだ。

言うまでもないことだが、本来パレスチナの北西部は地中海に接しており、沿岸地帯はおよそ三〇〇キロメートルにおよぶ。しかし

一九四八年のイスラエル建国後、その領域が事実上確定したことにより、沿岸部はすべてイスラエルの支配下に入った（一九六七年までのガザ地区沿岸部を除く）。「海に行きたい」という素朴な欲求の底にあるのは、こうした状況のなかでの世界とのつながりへの渴望だ。

注意したいのは、ムハンマド・アルハティーブは「海に行きたい」のであって、何もイスラエル領内に入りたいわけではないということである。だがどんな手段を考えてみても、パレス

チナの海にたどり着くまでには「イスラエル」がつきまとい、占領の現実を払いのけることは出来ない。占領のもつ粘着質的な嫌らしさから解放されるのは、海を前にしたわずか一時間だ。それを三千と六〇〇秒という「無限の時間」に転換させるところに、パレスチナの若者の情熱と知恵のありようが示唆されている。ムハンマドを呑み込んだヤーファの海はそれでもなお、パレスチナ人たちの外の世界とのつながりへの渴望を映し出し続けるだろう。

